

伊豆諸島鳥島におけるオキノタユウ(アホウドリ) 集団の保全と再生の展望 長谷川 博

今から38年前の1977年3月、初めて鳥島〔図1〕に上陸調査をしたとき、生存していたヒナは15羽だけだった。そのほかに、成鳥と若鳥を合わせて71羽を観察し、ヒナの死体4羽、若鳥の死体3羽を確認した。繁殖に失敗するつがいが多く、若鳥の死亡率の増加も懸念された。この現状を放置すれば、巣立つヒナの数が減り、いずれは繁殖つがい数が減り、アホウドリ集団が減少すると予想された。

この危機的状況を打開するためには、まず、繁殖成功率を引き上げることが必要だった。繁殖コロニーは急斜面にあり、営巣地の植生が衰退していた。それが原因だと考え、ススキとイソギクの株を移植して、植生を回復し、地面を安定させることを提案した。

1981年と82年に、環境庁・東京都は植栽工事を実施した。6年間の追跡調査を行なった結果、繁殖成功率は約67%に引き上げられ、巣立ちヒナ数は50羽を超えた。

従来コロニーの保全と管理

1987年の秋、従来コロニーのある斜面で地滑り（表層崩壊）が起こり、その後、泥流が頻繁に営巣地に流入した。その結果、移植した草株は泥流に埋まって枯れ、卵やヒナも泥流の犠牲になり、繁殖成功率は50%以下に低下した。もし、斜面で再び地滑りが起これば、従来コロニーは壊滅すると予測された。この緊急事態に対処するため、砂防工事と植栽工事による従来コロニーの保全管理を提案した。

環境省・東京都は、1993年に大規模な砂防工事を実施し、翌年から2004年まで従来コロニーの保全管理工事を継続した。さらに、ほく自身で2005年から2009年まで保全管理の補完作業を継続した。この保全管理工事の結果、予測どおり、繁殖成功率は以前の水準（67%）を回復し〔図2〕、従来コロニーからの巣立ったヒナ数は1998年に100羽を超え、2007年に200羽を超え、2014年には299羽になった。このコロニー保全管理の成功により、従来コロニーにおける繁殖つがい数は飽和状態に近づいた。

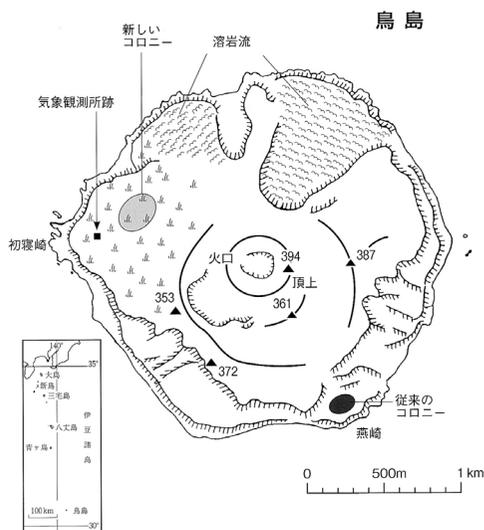


図1 鳥島の地形図・地名（*1）

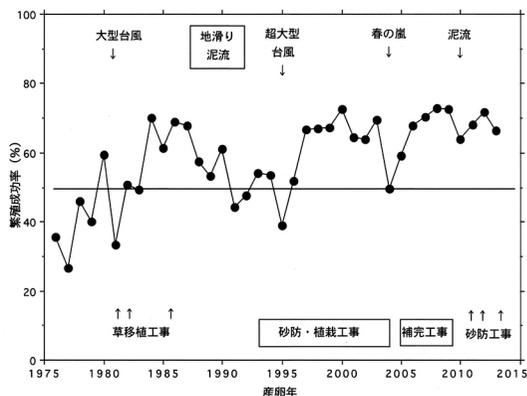


図2 従来コロニーにおける繁殖成功率（巣立ちヒナ数／卵数）の推移